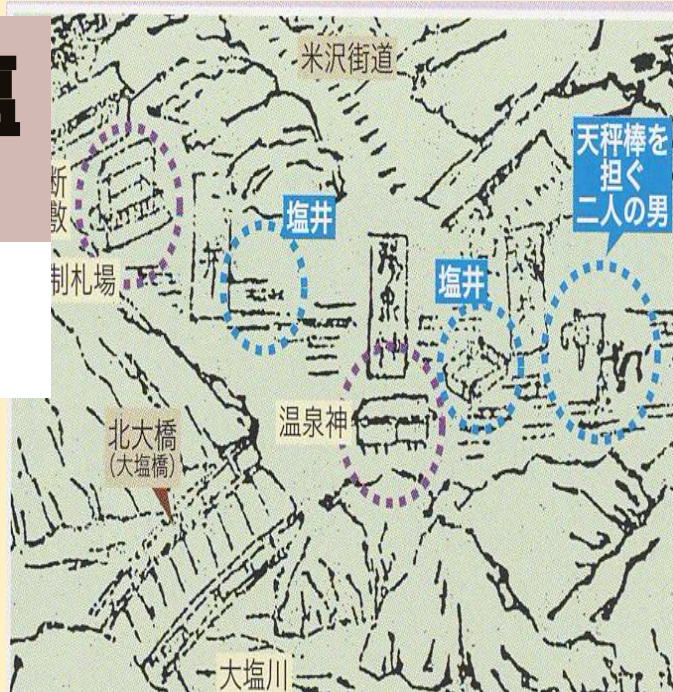


会津の山塩 北塩原村大塩

山塩の問合せ先
北塩原村商工会
0241-33-2311



「新編会津風土記」
塩井の図



直江兼続や会津藩の経済を支えた塩

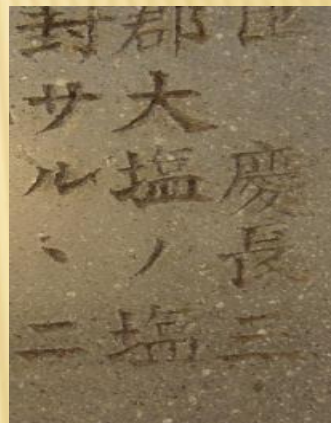
裏磐梯の北塩原村大塩では、温泉水から山塩を採っています。地名のとおり昔から塩が採れた所。内陸の会津は、生命には必要不可欠な塩を確保するため大変苦勞をしていました。会津は、7世紀頃までは、会津美里町の竹原遺跡の例から日本海側から塩を専用の土器に入れて運びでいました。平安時代になると、太平洋側から直径15センチの筒形をした製塩土器に入れて運んだことが、会津若松市の屋敷遺跡などの調査で判明しています。中世以降は壺に入れて運ばれ、江戸時代では高さ10センチの焼塩壺に入れて運ばれました。

塩を運び込むにはコストが掛かり、街道に敵対する武将がいれば、塩は入ってこなくなります。そのため、温泉から塩を採っていました。『新編会津風土記』の大塩村(北塩原村大塩)の項に「塩井二 村中大塩川ノ北大橋ノ東西ニアリ、東ノ井筒周一丈三尺、西ノ井筒周一丈五尺、共ニ深一丈余、梁溢塩井ノ類ナリ、～中略～今モ塩ヲ焼テ業トスルモノアリ」と塩を採った塩井が二基存在し、製塩を商売とする者が、住んでいたことが書かれています。『会津邑日記』の小沼組の項には「塩釜三十四」と書かれ、多くの塩釜が存在していました。大塩裏磐梯温泉は、今でも塩分を強く、源泉の出口には塩の塊がみられます。

慶長3年(1598)直江兼続の上杉景勝時代には、鈴木但馬守明貞が山塩役をし、米沢には移転せず会津に残り、今でも子孫が会津若松市に住んでいます。

大塩の塩井は、温泉街に架かる大塩橋の両側にありましたが、国道の改修で移転しました。塩井から約700メートルの木製樋で流し、鉄釜に入れて煮詰めました。燃料として薪を切り過ぎ、萱だけしか生えなくなったので米沢街道大塩の北を萱峠と呼ぶようになりました。

昭和19年から20年には、陸軍が塩を採っています。喜多方市の熱塩温泉や金山町の大塩温泉、会津若松市の芦ノ牧温泉などでも塩を採りました。会津では山塩と称し貴重な資源でした。 文責 石田明夫



鈴木氏の墓
会津若松市河東町



鈴木明貞の先祖が
いた埼玉県の深谷
城跡